

地域をつなぐまち歩きと観光拠点の可能性

～日常観光から地域の愛着を醸成するまちづくりを考える～

千葉県市川市 藤岡 智里



1. テーマ設定の背景と目的

(1) 市民の地域に対する意識

千葉県市川市は東京都に隣接したベッドタウンであり、都心へのアクセスが良好で、通勤や通学に利便性の高い都市である。夜間人口は約 49.5 万人に対し昼間人口は約 40 万人と市外への流出人口が多く、観光都市というイメージは希薄である。

市川市では市民の観光への認識や参加状況、観光振興への課題を把握する目的で令和 3 年度に会員制の WEB アンケート調査を実施した。その結果、「市川市で知人や来訪者におすすめできる場所、モノは何か」という質問に対し「文化・歴史」に次いで「おすすめできる場所、モノはない」という回答が全体の 2 割にもものぼった。また、市内での観光やレジャーに月 2～3 回以上参加するという回答者は 1 割にも満たないという結果となった。

市川市で知人や来訪者におすすめできる場所、モノは何か 市川市内での観光の頻度、レジャーの参加状況

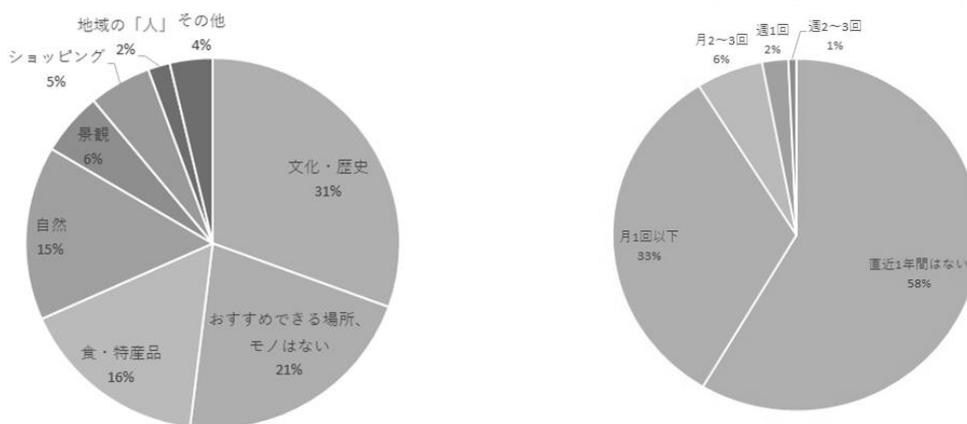


図 1 令和 3 年度 市川市 e-モニター調査 市の観光に関するアンケートをもとに筆者作成

筆者は現在観光振興の部署に所属しているが、実際に市民からも「観光するなら足を伸ばして都内に行く」という声をよく聞く。このように市民が地域に魅力的な資源がないと感じている要因として、都心への交通の利便性が高いベッドタウンであるがゆえに普段の日常生活において地域について深く知る機会が少ないことや、そもそも地域に対する興味関心が失われていることがあるのではないかと考える。

(2) 国内観光の動向と日常観光の可能性

現在国内においてインバウンド観光が盛り上がりを見せる一方で、日本人による国内観光の需要は停滞化している。要因としては円安に伴う物価高騰による実質所得の低下や訪日客の増加による宿泊費の上昇などで、日本人の国内旅行の需要は今後も横ばいで推移していくと予測されている。

こうした現状に伴い、近年「日常観光」への関心が高まりを見せている。有名な観光スポットを巡る非日常への旅が主流であった従来とは異なり、日常観光とは生活圏にある身近な場所やモノを観光資源と捉え、日常生活の延長線上で行われる観光のことである。

また、外部からの観光客を多く呼び込もうとする従来の観光スタイルに対し、日常観光における対象は主に地元住民や近隣地域の住民である。日常観光は、普段見慣れた生活の風景に新たな視点を加えることで住民が地域固有の価値を再認識し、地域への愛着心の醸成を促すことができる。その結果、普段の生活でその価値を見過ごされがちな歴史的建造物や商店街などの地域資源の保存や活用に向けた住民の主体意識も向上し、まちづくりや地域の活性化にも寄与すると考えられる。

(3) 日常観光におけるまち歩きと観光拠点

建築家ヤン・ゲールは著書『人間の街—公共空間のデザイン』で「街は、人々が歩き、立ち止まり、座り、眺め、聞き、話すのに適した条件を備えていなければならない」と述べている。つまりまちの在るべき姿はいわば市民による日常観光—地域を身体で経験し、五感を通して知覚すること—が行われている状態であるという主張である。その具体的な体験としては次のようなことが挙げられる。

①食を楽しむ体験

(例) 地元でとれた食材を使った料理を食べる、地元の郷土料理やお酒を楽しむ

②風景や自然を感じる体験

(例) 活気あるまちの喧騒を感じる、公園や水辺で緑や水に触れる

③文化や交流を楽しむ体験

(例) 地域のイベントに参加する、カフェや商店街で店主や他の客と会話を楽しむ

これらは自らの足でまちを歩き、まちの姿を身体で感じることで体験できるものである。また、カフェや飲食店、広場や公園など、日常の延長線上で気軽にふらっと立ち寄ることができ、他者との交流の中で居心地がいいと思えるような空間ひとつひとつがその拠点としての意味を持つだろう。

本レポートでは、日常観光という視点から、寺社仏閣などの地域資源が多く点在する市川市行徳地域を事例として取り上げる。また、住民が地域への関心を深めるきっかけとしてまち歩きの可能性を探るとともに、地域の魅力となりえる観光拠点の在り方について考察し、地域住民の愛着醸成を目指すまちづくりの方向性を探ることを目的とする。

2. 市川市および行徳地域の概要

市川市は千葉県の西部に位置し、江戸川を挟んで東京都江戸川区に隣接している。人口は令和 7 年現在約 49 万 5,000 人で、県内では千葉市、船橋市、松戸市に次ぐ第 4 位の人口規模を誇る。

地形的特徴として、市域は大きく北部の台地部と南部の低地部に分かれており、北部は標高 20～30 メートルの下総台地の一部を形成し、南部は江戸川と東京湾に面した湾岸地域となっている。この地形の違いが、地域ごとの特色ある街並みや文化の形成に影響を与えている。

行徳地域は東京湾に面した江戸川以南の市川市南部に位置し、エリア内人口は約 17 万人で、市内全体のおよそ 3 分の 1 にあたる。また中国、韓国、東南アジアからの外国人居住者も多く、その数は市内の外国人居住者 1 万 8,000 人のうち約半数を占める 9,000 人にものぼる。

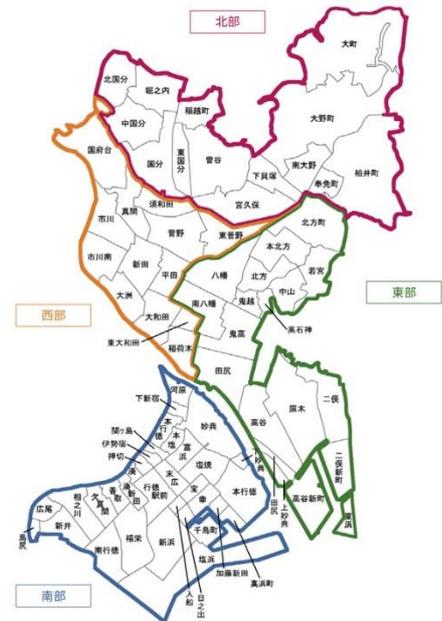


図 2 市川市全域地図

一方で、寺社仏閣などの歴史的建造物が点在しており、独自の文化が色濃く残っている地域でもある。江戸時代には製塩業で栄えた歴史を持ち、当時は江戸へ塩を運ぶための水運の拠点としても発展した。行徳と日本橋小網町の間約 12.6km を往復する船は「行徳船」と呼ばれ、成田山参詣客も利用したことから、かつて宿場町としても賑わいを見せていた。しかし当時は風水害に見舞われることも多く、1917 年の東京湾の暴風津波により塩田は壊滅的な打撃を受け、これを機に明治時代末より副業的に行われていた海苔養殖が本格的なものとなった。現在では海苔の生産者も減り、あまり市場に出回らない市川市の貴重な物産品となっている。

江戸時代の製塩業の発展は人口増加や地域固有の文化の形成を促し、「行徳(戸数)千軒、寺百軒」と言われるほど数多くの寺院や仏閣が建立された。明治時代の廃仏毀釈により寺社仏閣の修理修復を行う仏師の仕事は下火となったが、その技術を活かし、神輿づくりへと転換するようになった。塩田労働者たちの娯楽や結束を高めるための手段として神輿文化は民衆に広まり、「神輿の街・行徳」として発展していった。現在神社仏閣の数は減り、神輿店も「中台製作所」一店舗のみとなってしまったが、現在も年間を通じて伝統行事や祭事は続いており、寺社仏閣と神輿文化は行徳地域特有の文化として地域に息づいている。

3. 行徳地域の観光と課題

(1) まち歩きイベント

行徳地域の歴史や文化を継承する伝統行事はそれぞれの神社仏閣ごとに存在するが、以下のように地域が一体となって地域を盛り上げるまち歩きイベントも定期的に行われている。

<行徳寺のまち回遊展>

複数の寺院が連携し、参加者が自由に寺をめぐるまち歩きイベントである。令和6年は各寺院の境内にマルシェやキッチンカーが並び、本堂でのチェロコンサート、座禅会、落語などが開催された。境内の敷地が広い寺院が多いため、主にこのような会場型のイベントとして活用されている。

<行徳・南行徳神社巡り>

スタンプラリー形式で16の神社と観光施設をめぐるイベントで、1日で1,000人以上の参加者が訪れる。各ポイントでお参りをすると神社の情報が書かれたカードが配布され、一定枚数以上集めると記念品を受け取ることができる。神社境内ではお囃子などが行われ、子ども向けに昔遊びができるスペースを設置する神社もあり、様々なスポットを巡りたくなる仕組みとなっている。また、古民家を改築して作られたオアシス妙典では市内雑貨店や飲食店などによる物販やキッチンカーが集まるマルシェが開催され、当日の休憩スペースとして利用されている。



写真：八幡神社境内の昔遊びスペース



写真：神社巡り当日のオアシス妙典

(2) 観光施設

行徳地域における観光施設としては歴史文化を伝える上で、以下の2つの施設が大きな役割を担っている。

<中台製作所（行徳神輿ミュージアム）>

行徳に残る唯一の神輿工房である中台製作所では神輿に関する展示や、雑貨などのグッズ販売を行っている。また、神輿の担ぎ方の実演見学や、実際に担ぐこともできる「揉み手（担ぎ手）講習会」も定期的で開催しており、地域住民に祭り文化を知ってもらうための機会も提供している。



写真：行徳神輿ミュージアム

<行徳ふれあい伝承館>

かつて神輿づくりを行っていた旧浅子神輿店の資料がその主屋にて展示されている。建物は国の有形文化財に登録されており、神輿の他にも製塩、船運などの行徳の歴史や祭り文化について広く紹介している。主屋の向かいにある「お休み処」では、休憩スペースとして飲食を提供するほか、地元住民の絵画作品や小物の展示などを行っており、小さな交流が生まれる場にもなっている。



写真：行徳ふれあい伝承館 お休み処

(3) 日常観光から考える行徳地域

現在行徳地域で行われているまち歩きや観光拠点施設は、日常的に寺社仏閣を訪れたり、歴史文化に触れたりする機会がない住民にもそれらを身近に感じてもらうことができるものとなっている。「揉み手講習会」で初めて神輿を担いだ参加者が実際のお祭りでも担いでみたいと思い、毎年地域のお祭りに参加するようになれば、それはすでに日常観光の一環となり、地域への深い関心を育むきっかけとなるだろう。

今後の課題としては既存の資源やイベントに加え、参加者や来訪者の増加をさらに促すために、より住民の日常に近い形で内容を考えていくことが重要である。

行徳・南行徳神社巡りの参加者 30 人に聞き取り調査を行ったところ、毎回参加していると答えた人は 25 人であり、地元で長く住んでいる住民や、元々地域の歴史や文化に興味関心がある人が多かった。逆に地域外から新しく転居してきた住民にとってはまだ行徳の歴史文化に馴染みがなく、住民の日常と地域資源にまだ隔たりがあるのではないだろうか。

また、現在地域でのイベント情報を発信する場合は、まちづくり協議会の SNS での掲載や、自治会のポスター掲示、市内イベントや文化施設でのチラシの配布が主となっている。地域や歴史文化に関心がある人の目には留まりやすいが、今までイベントに参加したことがない住民の興味を引く発信方法においても今後さらなる工夫を考えていく必要があるだろう。

4. まち歩き事業と観光拠点の類型

全国各地で観光まちづくりの一環として地域をより深く知るためのまち歩きの取り組みや、観光拠点施設における情報・体験の提供は行われており、様々な自治体や団体で創意工夫が凝らされている。その特色は異なるが、大まかにどのような分類に分けられるのか、以下で整理していく。

(1) まち歩き事業

① ビジネス要素の強い「自立・独立型」

事業収入のみで成り立っており、認知度が高い観光資源が多い地域で開催される。ガイドブックやコースマップがいくつもある大都市などがこれに当てはまる。対象は主に外部からの観光客に向けており、地域全体がそれを受け入れる体制となっている。

② 観光地における「観光事業主軸型」

事業収入とキャンペーン収益などで成り立っており、ある程度認知度が高く、観光資源が多い観光地や地方都市で多く開催される。対象は外部の来訪者に向けられている場合が多い。地域全体というよりも事業に関わる一部の地域住民や団体のサポートにより成り立っている。

③住宅都市等を中心とする「まちづくり軸型」

事業収入と行政補助で成り立っており、市川市のように認知度の高い観光資源が少ない、中核都市や住宅都市で多く開催される。これまで観光政策に力を入れてこなかった地域の観光関連事業の軸となるまち歩きとなるため、先行事例が少なく、どのように観光まちづくりや個性を見出していくのか、その特質に近づける要素や成果が最も反映するとされている。

(2) 観光拠点

観光拠点となる施設としてはその役割や機能に応じて主に以下のように分類される。

①観光情報提供型

具体的な施設としては観光案内所や道の駅のインフォメーションセンターなどである。観光地の地図やパンフレット、イベント情報などの提供を通じて観光の出発点としての役割を担っている。

②歴史文化体験型

博物館や歴史的建築物、伝統工芸品の工房などの歴史や文化を体験・学習できる施設が該当する。行徳地域の中台製作所（行徳神輿ミュージアム）やふれあい伝承館は主にこの機能を担っている。

③商業・交流型

地域経済の活性化に寄与する施設で、主に地元市場や商店街などの場所が挙げられる。

④イベント・集客型

大型イベントや地域振興の活動の場として活用される。主にコンベンションセンターや野外ステージなどがこれに該当する。

実際は一つの施設でもこれら複数の機能を兼ね備えることが多く、地域の特性や観光の目的に応じて整備することでより多くの人の関心を集めることが可能となる。

5. 先行事例

以下では筆者が実際に視察で訪れた地域でのまち歩き観光の取り組みや観光拠点施設の先行事例を取り上げる。

(1) 青森県八戸市 八戸さんぽマイスターによるまち歩きガイド

「八戸さんぽマイスター」は多くの人に地元の魅力を伝えたいという思いで結成された八戸市のまち歩きガイド団体である。有名な観光スポットや、地元で人気なお店をめぐる一般的なまち歩きと、この八戸さんぽマイスターがガイドとして案内してくれるまち歩きが異なる点は「地域の日常」にある隠れたまちの魅力を参加者に伝えているところである。

みろく横丁を中心として地元の常連客でなければ足を踏み入れることすら躊躇われるよ

うな狭い路地裏などにあるお店にも連れて行ってくれ、地元のお店の人たちと会話し、食を味わい、なりたちを説明してもらおうというディープなまち歩きを楽しむことができる。実際訪れた店内のほとんどは常連客と思われ、地元民の一員となったような感覚を味わうことができた。外部からの観光客にとっても魅力的なツアーだが、地元住民を対象としても、地域の魅力を人々と交流しながら再発見することができ、日常的に訪れたいくなるような自分だけのお気に入りのお店を見つけるきっかけとなるのではないだろうか。



写真：八戸さんぽマイスターのガイドによるまち歩き

(2) 青森県黒石市 松の湯交流館

元銭湯である松の湯は地域の人々の交流の場という役割を継承し、観光や地域のコミュニティの拠点として再生した交流施設である。内装は銭湯の浴槽などがそのまま残されており、「日常の一部を松の湯で過ごす」という目的で市民サロンやギャラリー展示、地域物産品の販売、伝統文化体験会など市民の幅広い活動の場として活用されている。



写真：松の湯交流館

また、松の湯交流館は黒石市中心部のこみせ通りに位置し、まち歩きの拠点や地域資源の情報発信拠点としての役割も担っている。観光客だけでなく地元住民が日常的に利用する場で、地域の歴史文化の価値を見直し、お気に入りスポットを見つけてもらうための機会を提供することで、住民の地域に対するさらなる関心を引き付けている。

6. 日常観光の新たな可能性の提案

参考事例を踏まえ、行徳地域において新たに日常観光の可能性となる資源と既存の資源の活用について以下のとおり提案する。

(1) まち歩きにおける取り組み

① 新たな要素を取り入れたイベントの開催

よく「行徳には地元ならではのグルメが少ない」という声が聞かれる。確かに駅周辺ではチェーンの飲食店が立ち並び、地域独自の特色が見えにくいと感じることもある。しかし、外国人居住者が多い行徳では世界中の食材が手に入るお店や、中国・韓国・インド・タイといった多国籍料理店も数多く存在する。そこで、このような地域の特徴を活かし、新たなイベントとして定期的な「多国籍料理店めぐり」のまち歩きを提案したい。

多国籍料理を楽しめるお店を歩いて回れるイベントを開催することで世界各国の食や

文化に触れ、理解を深める機会をつくる。行徳において「多国籍な雰囲気」を一つの資源としてとらえることが可能になるのではないかと考える。

また、店主と気軽に会話しながら飲食できるスペースを確保し、参加者が店の魅力を深く知ることができる交流の場としての機能も持たせたい。イベントをきっかけにまちの新たな一面を知るとともに、リピーターになりたくなるような「まちのお気に入り」を見つけていくことができるのではないかと考える。

観光資源を考えた際、一般的には文化財などの「モノ」にのみ価値が置かれがちだが、人々にとっての「お気に入り」となり得るものは歴史文化や自然にとどまらず、人との交流や暮らしなどに密接に関わるものも多い。まち歩きのメリットは日常に隠れたそういったまちの魅力を自らの目を見て、肌で感じる機会を提供することにある。それが地域を深く知ることであり、地域への愛着を醸成する第一歩なのではないだろうか。

とはいえ、地域住民の歴史や文化に対するさらなる関心を高めることも非常に重要である。以下ではその既存の資源を活かしたイベントについて考える。

②既存資源の活用

東京都世田谷区では地域のつながりを生み出す場として「つながるホコ天プロジェクト」を行っている。毎週商店街の歩行者天国の時間にテントや人工芝を設置し、地元の食を通じた交流を促したり、まちづくりを考えるワークショップを開催したりと、地域住民が世代を超えて自由に参加できるイベントとなっている。

南行徳駅周辺でも毎年商店会の主催で年2回ほどホコ天が開催されており、当日は駅前道路に屋台や小さなステージ、飲食スペースとしてのテーブルが設置される。このように住民が気軽に参加しやすいイベントの中で、ペーパークラフトなどを使った歴史的建物に関するワークショップや、神輿やお祭りの文化について学べる講座など、地域の歴史文化について楽しみながら学べるスペースを設けることを提案したい。

普段の生活の中で、地域の歴史文化について学ぼうという意欲はなかなか湧きにくい。しかし誰でもふらっと立ち寄れる開かれた場所で、地域の人と交流しながらであればそのハードルは自然と低くなるのではないかと考える。



写真：南行徳ホコ天の様子



写真：「つながるホコ天プロジェクト」
おやまちリビングラボより引用

(2) 観光拠点施設の在り方

観光拠点施設では、単なる観光案内所としての役割を超えて、地域の魅力を発信し地域の交流を促進する「地域のリビングルーム」としての役割を担うべきである。以下ではその具体的な取り組みについて提案する。

①商業・交流×歴史文化体験

まず、「塩づくりと海苔すき体験ができるカフェ」として地域資源を活用した施設の設立を提案したい。かつて行徳で盛んであった塩づくりと海苔づくりの体験を提供する場と、そこで作られる塩と海苔を使用したおにぎりを提供するカフェを併設する施設である。

かつて塩づくりが盛んであった行徳の歴史や文化の記憶は、時代とともに薄れつつある。地域の拠点となる施設で塩づくりを実際に体験し、地域住民が気軽に参加できるワークショップを開催することで、歴史を肌で学ぶ機会を提供したい。そのため、まずは現在において完全に失われてしまった行徳地域における塩づくりを部分的に復活させる取り組みを考える。

行徳で塩づくりが行われていた当時、製塩方法は入浜式で行われていた。入浜式とは、堤防の内側に砂層地盤の塩田を設け、潮が満ちてくると堤防に設けられた溝から海水が塩田に浸透する仕組みであり、太陽熱で水分が蒸発すると塩田の砂に塩分が付く。それをかき集めて海水をかけて濃厚な塩水を取り、釜で煮つめて製塩を行なう。干満差が大きく遠浅の立地を活かした行徳地区ならではの製塩方法である。



写真：宇多津町観光協会ホームページより引用

また、行徳地域で今も続く海苔づくりの体験も併せて行うことができる場としたい。海苔すき体験は毎年行われる三番瀬まつりなどで開催されており、行徳の水産業を体験できる貴重な機会となっている。このような体験が常設型施設で行えるようにすることで、日常的に歴史や産業に触れることができる。

加えて、併設したカフェでは施設で作られた塩と海苔を使用したおにぎりの提供を行う。体験で作った塩や海苔は持ち帰り可能とし、施設内には市内の特産品



写真：浦安・行徳・妙典
【東京湾岸千葉情報】より引用

を購入できるお土産コーナーも設置する。これにより、施設の来訪者が行徳の味を家庭に持ち帰ってからも楽しむことができる。

以上のように誰もが気軽に立ち寄れるカフェスペースとしての機能と塩と海苔作りの体験プログラムによる歴史を学ぶ場を併設することで、学習の場と日常生活の隔たりを埋めることができるだろう。

②観光情報提供機能

地域の歴史文化に関する展示だけではなく、商店やカフェ、マルシェなどの日常的な情報も積極的に織り交ぜることが効果的であると考え。そのための手段として民間企業や商店会との連携のほか、市民や市内大学生を主体とした情報発信も非常に有効である。

例えばグルメ、地域行事、日常に隠れた名スポットなどの情報を発信するための市民サポーターを募り、ブログ形式で情報発信をしていく方法を提案したい。市民目線でまちの魅力を伝えることで、より日常に近い地域の新たな側面を見出すことができると考える。その際は、サポーターと市で連携を取り、情報の整合性を確認しながら SNS やウェブサイト、デジタルサイネージを活用した情報を集約し、積極的に発信していくことが必要であろう。

③まちづくり支援機能

観光施設の一部を、地域団体の活動拠点としての会議室や、新たな観光の可能性を考える場として提供することも提案したい。例えば、市民サポーター同士が情報交換や打ち合わせを行える場を設けることで、地域の観光活動をより活性化できるだろう。

また、観光ボランティアガイドの育成を目的とした勉強会を開催し、地域の歴史や文化を学ぶ機会を提供したり、まちづくりのアイデアを生み出すための議論の場として提供したりすることで市民同士の新たな交流を促したい。

こうした取り組みを通じて、市民の結びつきが深まり、観光を軸とした地域の活性化につながるのではないだろうか。

7. 最後に

自治体が観光振興を進める大きな目的の一つは、住民の郷土愛の形成に貢献することであると考えている。少子高齢化や人口減少の社会構造の変化が顕著化する中、市川市の人口推移の現状は横ばいで増加しているものの、いつ減少に転じるか分からない。

地域社会を維持していくためには住民が主体的に地域に関わり、自らが住む地域に愛着を感じ、住み続けたいと思うまちを形成していくことが望まれる。そのアプローチの一つが観光まちづくりであり、住民による地域資源の認識や新たな魅力発見の機会となるまち歩きと観光拠点は重要な鍵となる。また、自分の時間や主体性をもちながらも、ゆるやかに人とつながる時間や空間が地域の暮らしの中にあるということが「観光」と「日常」の境界を曖昧にし、より住民の地域への愛着形成を促すことができるのではないだろうか。

生まれ育ちが市川市でなかった筆者も、以前は「市川市と観光はどうやっても結び付かない」と感じていた。しかし自らがまちの魅力や可能性を知らないまま他者にそのまちを好き

になってもらおうと促すことは不可能である。そのような思いでまち歩きを行い、住民やまちづくり協議会の方々と交流し、まちの様々な姿を見るたび、新たな魅力を発見することができた。

市民の「このまちが好き」という感情があつてこそ、歴史文化の保存や経済産業は失われず、発展していく。絶えずその思いに火を灯すことができるよう、これからも多角的な視点からまちづくりについて考えていきたい。

【参考文献】

- ・データにみる市川市の都市基盤 2024 (2024 年)
- ・首相官邸ホームページ『観光の現状について』
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankorikkoku/dai23/siryoul.pdf>
- ・國學院大學地域マネジメント研究センター『「観光まちづくり」のための地域の見方・調べ方・考え方』(2023 年)
- ・西村幸夫『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』(2009 年)
- ・ヤン・ゲール『人間の街 公共空間のデザイン』(2014 年)
- ・わっしょい！行徳ホームページ <https://www.wasshoigyotoku.com/about-gyotoku/>
- ・行徳まちづくり協議会『行徳の歴史と神輿と祭り』(2022 年)
- ・戸所隆『日常空間を活かした観光まちづくり』(2010 年)
- ・島原万丈+HOME'S 総研『本当に住んで幸せな街』(2016 年)
- ・小長谷一之『地域創造型観光』(2024 年)
- ・おやまちリビングラボホームページ <https://livinglab.oyamachi.org>
- ・宇多津町観光協会ホームページ <https://utazu-kanko.jp>
- ・パイ インターナショナル『地域発！つながる・集める施設のデザイン』(2019 年)
- ・浦安・行徳・妙典【東京湾岸千葉情報】ホームページ <https://urayasu.gyotoku.org>
- ・山納洋『歩いて読みとく地域デザイン：普通のまちの見方・活かし方』(2019 年)
- ・松本茂章『地域創生は文化の現場から始まる：全国 35 事例に学ぶ官民のパートナーシップ』(2024 年)
- ・青木純・馬場未織『パブリックライフ—人とまちが育つ共同住宅・飲食店・公園・ストーリー』(2024 年)
- ・狩野哲也『まちのファンをつくる自治体ウェブ発信テキスト』(2020 年)